

新宮城下町遺跡

現地公開資料

平成30年8月4日 10:30~

主催：新宮市教育委員会

公益財団法人和歌山県文化財センター

1. はじめに

新宮市教育委員会では、(公財)和歌山県文化財センターに委託して新宮城下町遺跡の調査を実施しています。発掘調査は、新宮市文化複合施設の建設に伴うもので、平成28年に1次調査として約2,300㎡の調査を実施しました。今回は2次調査としてその西側部約3,500㎡の調査を実施しています。調査箇所は、新宮城の西側に位置する旧丹鶴小学校の敷地になります。



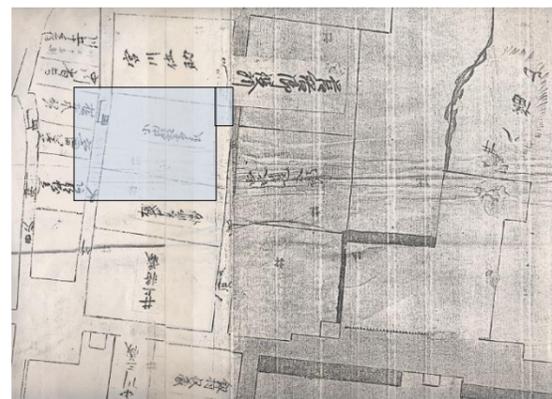
新宮城から調査地を望む

2. 新宮(丹鶴)城について

新宮城は、関が原の戦いの後、紀州藩主となった^{よしなが}浅野幸長の重臣である浅野忠吉が慶長六年(1601)に築城を開始しました。元和元年(1615)に一国一城令により廃城になりますが、元和四年(1618)に再び築城が認められます。しかし元和五年(1619)に幸長が広島に転封になるのに伴い、忠吉は備後三原城へ移ります。紀州藩主には徳川頼宣がなり、新宮城にはその付家老である水野重仲が入り、築城を続けます。2代重良は伊佐田の堀を掘削するなどして、寛永十年(1633)に完成させました。その後も3代重上が石垣などを造築し、寛文七年(1677)にほぼ現在の形になったとされています。城下町も江戸時代の前半頃には、幕末に近い町割りとなっていたことが絵図などから窺うことができます。



新宮古図 (1647~1651) (新宮木材協同組合蔵)



幕末頃の調査区付近の絵図 (新宮市立図書館蔵)

3. 調査の成果

調査地は昨年まで建てられていた丹鶴小学校の校舎やそれ以前の木造校舎に伴う建物基礎、さらには昭和21年の昭和南海地震による大火災時の焼け瓦などを廃棄した大きな穴などによって江戸時代の遺構面がかなりの部分で破壊されていました。こうした中でも1次調査で見つかった屋敷地境の石垣の延長部を検出しました。この石垣は大きな石を用いたりっぱな造りで、新宮城の創建時に近いものと考えられます。また、絵図にも描かれている南北に延びる竹矢町通りの一部も確認することができました。そのほか近代のものですが石積みの地下式倉庫もみついています。遺物では江戸時代のお茶碗など日常雑器のほか、便漕として転用されていた戦国時代の備前焼の大甕などが見ついています。

4. まとめ

後世の破壊がかなり認められるものの大規模な石垣が残っていたこと、絵図に描かれていた竹矢町通りを検出し、その規模や構造を明らかにできたことは大きな成果であったと言えます。また、この遺構面の下には鎌倉時代はじめの遺構が残っており、今後調査が進むにつれて城下町以前の様相がさらに明らかになることと思われます。



近代の地下式倉庫



備前焼の大甕



竹矢町通り



屋敷境の石垣